

会 議 録

○課題別評価について

委員長：プロジェクト研究課題の設定について、どのような考えをお持ちか伺いたい。

農業研究所：農業を始めるにあたって、低コスト・省力化が大きな課題となっている。イチゴでは労働時間を少なくする技術を開発し、育苗の手間を省き育苗後の管理も省ける。労働時間の減少と育苗コストの低減が図れると認識している。谷水を利用した冷却法についても、低コストとなるよう取り組んでいきたい。

果樹研究所：果樹は結果年齢が5年以上でありその間は収入がない。この技術により成園化コストを下げるができる。今は販売単価が上がってこないなので、すぐにたくさん作れることは重要。

畜産研究所：阿波尾鶏経営安定のための課題。阿波尾鶏原々種鶏は1年くらいが種卵採取期間であるが、強制換羽という技術により1.5年に延長する。1年で廃鶏になるところを延ばして、3回の入れ替えが2回となる。種鶏肉は価値がないが、機能性や付加価値をつけて増収を図る。この2点から研究を進めていく。

森林林業研究所：シイタケ害虫であるナガマドキノコバエ誘引殺虫器を商品化し、収量安定化を図っている。青色LEDの照射でMサイズが多くなる増収効果を見出しており、発生状況を検討中。

水産研究所：ワカメ廃棄物をシイタケ栽培に利用する研究事例がなく、効果を確認している。ワカメの部位によってアルギン酸抽出量が異なる結果を得ている。輸送や乾燥に要するコストをどのように低減するかが重要。

委員長：競争的資金の廃液ゼロやハモの課題はどうか。

委員：低コスト化は合理化につながるものだが、将来の雇用を削っているのではないかととも思う。高齢者のできるようになってきていると懸念している。合理化を求めてきた今までの試験と反対に、高齢者の担える部分を作る技術開発も必要ではないかと考えている。

委員長：省力化で見落としがちなポイント。環境分野もそうだ。

委員：人が動くということはすなわち環境にやさしい。報告書はよく全体の意見を要約していただいているが、あらためて全体の視点で見てそういう意見がある。

委員：研究は一朝一夕で成果が得られるものではない。有効なものであっても期間内にできない場合、切ってしまうのではなく必要なものは続けていくシステムが必要なのでは。

委員長：研究の発展プロセスについて解説をお願いします。

斉藤課長：多くの課題は3年かけての成果をまとめているが、成果が出ないもの、期間が長くかかるものがあるとの意見はそのとおり。試験課題の設定にあたっては、まず3年間で何ができるのかを考える。例えば9年かかるのであれば最初の3年で何ができるかステップを考え、実用化に至らなくても次の技術開発に取り組みるように考えている。

委員：研究を続ける重要性のほか、技術の伝達も県職員は異動があるので問題があると思う。畜産農家も減っている所以对応は難しいかもしれないが、続けていってほしい。

委員長：研究だけでなく普及にも話を進めたい。ニーズをどのように把握しているのかとの意見があるが、これについて補足を。

高度専門技術支援担当：普及課題設定にあたって、県下に7ヶ所ある農業支援センターでは、日々農業者と接しているなかで、課題の汲みあげを行っている。これらを研究テーマとするには、高度技術支援担当が仲介をしている。高度は研究成果の現場移転を行い、地域と協力しながら普及していく。双方向の課題があるが、普及と研究の連携会議もあり意見は汲みあげられている。

所長：農家のニーズをいかに汲み取るかは重要なテーマであり、企業のマーケティングリサーチを勉強したい。これは、農家の考えをアンケートし、結果を統計処理して方向性を定めるもの。新しい手法を導入して改善を考えている。

委員：高齢化が進んでいるので、農業・地域のあり方を考えるのは非常に重要。よろし

くお願いしたい。

委員：ベにはるかを作っていることを話させていただいたが、やはり労力がかかる。なると金時ブランドを保つのと省力化の両立を考えてほしい。市場出荷だけでは価格を保てず、6次産業化が必要ではないかと考えている。2月から5月までハウスで育苗しているが、楽には場へ運びたい。体が痛いので、研究をしてほしい。

農業研究所：サツマイモは育種・栽培・病虫害についていろいろ研究しているが、育苗についてはできていない。内容については検討させてもらい、できることは協力させていただきたい。

委員：農業は手間がかかるから高く売れるわけでもない。サニーレタスをトンネル栽培して手間をかけても、高く売れない。

委員長：手間をかけても売れない現実は苦しい。その他研究と普及について何か。

委員：話は戻るが高齢者の問題で、民間調査で上勝町へ入ったが、お爺さんがあと10年で農業はダメになると仰る。その方は70代で後継者もおらず、このままでは集落もなくなってしまう。本当に心配な問題。先を見越して何を作るか変えていかないと、ダメだと思う。パイロット事業でみかんを推進したがものになっていない。小規模な山間地での農業は大変、どうすればいいのかという問題がある。

逢坂課長：中山間地域の深刻な話で、限界集落が増えているのが徳島の実態。人が住めないといけない。農業の多面的機能などあるが、経済的基盤が必要であり、若い人の生活は難しいかとも思う。上勝町のいろどりは脚光を浴びているが、工夫すれば基盤ができるだけ地域課題を汲みあげて努力している。

所長：限界集落について一朝一夕での解決法はない。ひとつの手法として地域を一つの経営体とみなす集落営農がある。特効薬ではないがそういうものを使いながらやっていきたい。

委員：農業人口が減りつつあるなか、農業に関する職員や企業サイドから、いずれ食料難の時代が来ると言う。何をすればいいのか。集落営農をするためにひとつひとつ必要な事項をあげていっても、結局どうすればいいのか。かわらないのではないかとこのころが。手間がかかるわりに農業は儲からない。食べるために必要なものでありながら、農業は無視されているところがある。このままでは酪農をする人がいなくなる。研究だけでなく、もっと農業そのものを考えてほしい。

委員長：大松委員の意見は次代を担う人材育成につながることで、教育研修業務へ移りたい。安定的農業の突破口として教育は重要。進路についての質問もあろうかと思うので、11～14頁の意見を束ねて補足をお願いします。

農業大学校：農大への期待・激励を頂いた。専攻コース別へ移行して今年が初めての卒業生となる。それぞれのコースにあった進路が理想であるが、就職が決まっていな者が9名いるという厳しい状況。運用2年目で軌道に乗ってきているが、さらに研究しなければならないと感じている。

委員長：多様な意見が出ているので、委員に補足説明を願いたい。

委員：有機の委員をしている。美馬のユズでお年寄りしかいないので有機でユズを作ったが、農協に出してもとってくれず捨ててしまった話を聞いた。売れなければジャムにするなど、農協や県で、まとめてくれる機関があればと思う。売れずに返されると生産者は続ける意欲がなくなってしまう。

逢坂課長：産直市で売るなどして地産地消を進めたい。農業支援センターは消費者と生産者をマッチングするのが得意分野なので、役割を果たしていけるのではと考えている。今後、この仕事の比重が増すと思う。

委員：県のほうでも積極的に消費者とかかわりを持ってほしい。

委員：生産者の声が県民に伝わっていないのではないかと。もっと情報発信していくべき。地域のものを優先して食べることを考えていけば生産者を支えるし、いろいろな分野が協力してやっていると、ワカメの課題のようにもっと横のつながりを持ってほしい。漁業者は収入を得て生活できるなら漁業をやりたい人ばかり。嫌でやめていくのではなく生計が立たないからやめていく。なんとか生活ができるような方向に、県民皆がそういう方たちの力になれるようにしていただければ。生産者が生き残っていけるようにし

てほしい。

委員長：農林水産業の問題について指摘をいただいた。森部長に応答願いたい。

部長：農業に関心を持っていただくためのPR、農業を目指していただく方へのPRをし、方向性をはっきりと県民に示すことが重要。これは従来県の苦手な部分であった。地産地消も県民のバックアップを得ないと成り立たない。農業支援センターに加え、新拠点の整備で技術開発と農大の充実が図られ、農家が心配なことは相談していただける。さらに県民にわかっているPRに努めたい。

○総合評価について

委員長：課題別評価をここで終え、ワンストップサービスについて整理してみたい。研究成果をなるべく早く普及へ移し、担い手が対応できる素地としての教育連携がワンストップサービスということだと思いが、各委員の意見を伺いたい。

委員：思いのほかよく機能していると感じた。現地を視察して直接農業者から話を聞いてもよいと思った。頑張っている方が県内にいることはすばらしいこと。それをワンストップサービスで支援しているのは評価できる。

委員：外部評価委員となったときに、県組織の連携をお願いした。今は県へ相談するとすぐに返事が返ってくるようになった。ありがたいこと。

委員：鳥獣被害でサギのことを藍住支援センターへ相談すると、よく対応していただいた。他の住民は対応してくれていることを知らないかもしれないが、私はよかったと思っている。

委員：農林水産業もビジネスなので、スピードが大事。そういう意味でセンター新拠点整備でサービスも迅速になると期待している。鳥獣被害では知人の阿南の筍がイノシシにやられてしまった。上勝でもイノシシ、シカ害がひどく、対策が必要。徳島はよい農林水産物がたくさんあるので、ブランド力を磨いてほしい。ブランド名に「阿波」をつけるようにしてPRしてほしい。阿波山田錦は全国の蔵元がほしがっていると聞いている。よい商品を伸ばしていくことが重要。

委員：JAの合併のようにならず、農家が生き残っていけるようにお願いしたい。

逢坂課長：資料3の12頁普及指導へのコメントについて補足を。電話でも相談できるし、来ていただいてもよい。ワンストップでやっていく。

委員長：総合評価として、①ワンストップの表示、②吉野川でのユリボックス栽培や天敵などワンストップが現場と結びついた例、③経営者を目指したいとの農大キャッチフレーズ、④ホットな話題として新拠点整備。こうした視点を中心に総合評価を整理させていただく。